

『クリスマスの本質』

～共感～この身になりますように 詩篇22編

『LET IT BE』

今日は聖書のストーリーから「共感」とはどういうことかを考えたいと思います。

ビートルズという世界で最も有名と言っても良いグループがいます。彼らの代表曲である『LET IT BE』の歌詞にはこのような一節があります。

『LET IT BE』※一部抜粋

When I find myself in times of trouble,
Mother Mary comes to me
Speaking words of wisdom, Let it be.

この歌詞はグループが分裂の危機に陥った時に一人のメンバーが書いたものです。「問題の中にあっても神様の計画になりますように」。まさしく、ルカ 1:35-38にあるストーリーそのものでした。イエス様の十字架の愛に共感した人をおして、その感動は伝わっていきます。様々な感情が出てくる中でも、神様の計画が「どうかこの身になりますように」と祈る私たちに、神様は多くの実をもたらしてください。

『あなたは私に答えてくださいます。』（詩篇 22:21）

詩篇 22篇を読むとイエス様が十字架の上で嘆き苦しまれている様子を私たちは知ることができます。1節から 21節までは受難の詩が続きますが、21節の後半『あなたは私に答えてくださいます。』ということば以降、この詩は一変します。私の近くにおられる神様が救いを与えて下さるといふ確信と喜びから、神様を賛美することばへと変わっていきます。それはこのく答えてくださる>ということばに、イエス・キリストの十字架と復活があらわれているからです。

クリスチャンとして歩み中、自らが正しいもののように振る舞ってしまったり、そうできてない人を裁いてしまうような心がないでしょうか。

イエス・キリストの誕生や復活は、特別な日だけのものではありません。私たちにとってイエス様がお生まれになったことは毎日のよろこびです。そして、十字架の贖いと復活を日々思うとき、私たちにく答えてくださる>神様の愛を知り、神様を賛美するものへと変えられていきます。その神様の愛を知った私たちが共感する力を失ってしまうことがないよう気を付けなければなりません。

『私たちの弱さに同情できない方ではありません。』（ヘブル 4:15）

ヘブル 4:15の御言葉にあるように、イエス様は私たちの弱さに同情できない方ではありません。ゆえに、私たちに共感するために十字架にかかってくださいました。イエス様は人が生まれる場所ではない家畜小屋で生まれました。そしてその誕生を多くの人に喜ばれたのではなく、そこにいたのは人として数にも数えられていない羊飼いと家畜でした。それくらい最も低い場所に降りてきてくださったのはなぜでしょうか。それは私たちを理解する（Understand）ためです。このようにして私たちに近づいて来てくださった方に、私たちは何をしたらよいでしょうか。御言葉の続きにはこのようになります。

ヘブル 4:16『ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。』

私たちは十字架の前に立ち、イエス様に近づいていくアドベントを過ごしていきましょう。

みことばは、私たちの根底を変える

神様は自分の在り方を捨てるほどまでに、私たちと関係（Relation）を持ちたいと願ってくださっています。私たちはなぜ十字架を見上げて礼拝をするのでしょうか。仕事だから礼拝しているものではありません。神様に近づきたい、神様のところにいたいからです。心配だから礼拝するのではありません。神様からの平安を受けるためです。信仰に立って神様のことばを求めるなら、神様に全て委ね聖霊に満たされます。

第II歴代誌 16:9『【主】はその御目をもって、あまねく全地を見渡し、その心がお自分と全く一つになっている人々に御力をあらわしてください。』

神様は全地を見渡して、神様の心と一つになる人たちを探しているとあります。神様はあなたを探しておられます。ですから、私たちは「神様、私はここにいます。LET IT BE（どうかこの身になりますように）」と答えていきたいと願います。私たちに与えられた願いと志が神様の心と一つになるとき、私たちの周りで奇跡が起こり始めます。

クワイ河収容所の奇跡

スコットランド人の捕虜アーネスト・ゴードンは、第二次世界大戦時にタイ・クワイ河流域の日本軍俘虜収容所に収容されます。ここでの捕虜の仕事は橋をつくることでした。ある日、橋づくりから帰ってくるとスコップが1つないことがわかりました。日本兵は「脱走を企てているものが多い」と考え、捕虜たちを並ばせ、列の右端にいたものに銃口を向けました。そして「誰がやった」と捕虜たちに詰め寄りながら今にも手元の引き金を引こうとしているとき、一人の捕虜が「私がやりました」と歩みでました。その瞬間、担当兵は彼を銃で撃ちました。しかし、もう一度スコップの数を確かめると全てのスコップがあったのです。誰も脱走を企てているものはいませんでした。捕虜たちは牢に戻って考えました。「なぜ彼は“自分がやった”と嘘を言ったのか」「殺されるのとわかっていただけになぜ」。そして、捕虜たちは気づきます。彼はクリスチャンだったのです。その日から収容所に変化が起こり始めます。アーネスト・ゴードンは反キリスト教でしたが、一人のクリスチャンの生き方を見て、終戦後、牧師になりました。「私がやりました」と手を挙げた彼は自分が殺されることはわかっていました。しかし、仲間の命が失われそうな状況の中で「私です」と押し出されるように出ていきました。イエス・キリストの十字架を背負った彼をおして、多くの人の心に変化をもたらす奇跡が起こりました。これがイエス・キリストの生き方です。

神様の計画が「どうかこの身になりますように」と私たちを尽き動かす力は、「共感」という名の神様の愛です。聖書のストーリーには愛の共感がたくさんあります。相手の身分や過去に関係なく、後に裏切られることがわかっていても、イエス様は私たちのところに来てくださいます。なぜなら、私たちの痛みに共感できない方ではないからです。

アドベント3週目、イエス様に心を開けるクリスマスにしていましょ。十字架に心を開けるなら、私たちの周りにいる痛んでいる人、傷ついている人の心に私たちは神様の愛で寄り添うことができます。ゴルゴダの丘でイエス様と共に十字架にかかった囚人の一人は『「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください。」』（ルカ 23:42）と願いました。私たちも十字架の前に出て、素直な願いを祈っていきましょう。

祈りましょう

愛する神様、あなたの御名を賛美します。

『彼は主の前に若枝のように芽ばえ、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。』

彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を導ばなかった。

まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。しかし、【主】は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。

しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。

彼の墓は悪者どもとともに設けられ、彼は富む者とともに葬られた。彼は暴虐を行わず、その口に欺きはなかったが。

しかし、彼を砕いて、痛めることは【主】のみこころであった。もし彼が、自分のいのちを罪過のためのいけにえとするなら、彼は末長く、子孫を見ることができ、【主】のみこころは彼によって成し遂げられる。』イザヤ書 53:2-10

私たちをおして神様の御心があらわれますように。私たちの心が造り変えられ、目線が変えられますように。十字架の復活とともに歩むことができる恵みを受け取り、大胆に神様に近づき、クリスマスの真実を受け取った私たちを、どうか用いてください。

イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

（要約者：岡本 享子）

（2025年12月14日）